2022年12月3日　インド大使館　バガヴァッド・ギーター

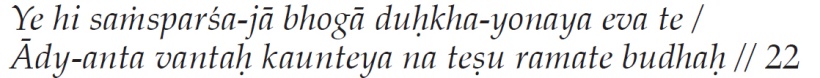
・朗誦：第13章12～21節

・引用：第5章21～22節、第18章36～39節、第3章39節

みなさん、おはようございます。

今日は、11月の勉強会で話した節がとても大事ですから、もう１回説明します。

5章22節　７８ページ



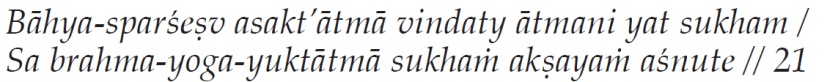
イェー　ヒ　サンスパルシャ・ジャー　ボーガー　ドゥッカ・ヨーナヤ　エーヴァ　テー/アーディ・アンタ　ヴァンタハ　カウンテーヤ　ナ　テーシュ　ラマテー　ブダハ

*感覚的接触による快楽は一時的なもので、後に悲苦を生ずる原因となる。それ故、始めと終わりとお考え、覚者は、そのような空しい快楽には心を向けないのだ。クンティー妃の息子（アルジュナ）よ！ //5-22*

ドゥッカ・ヨーナヤ：すべて悲しみの源となる

前の節も関係ありますから読んでみてください。

5章21節　７８ページ



バーッヒャ・スパルシェーシュ　アサクタートマー　ヴィンダティ　アートマニ　ヤット スカム/サ　ブラフマ・ヨーガ・ユクタートマー スカン アクシャヤン アシュヌテー//5-21

*外界の感覚的快樂に心惹かれることなく、常に内なる真我の楽しみに浸っている人は、常に至高者に心を集中し、限りなき幸福を永遠に味わっている。 //5-21*

21節と22節をくらべると何が違うかがわかります。すべての苦しみは外からくるもの、つまり感覚の対象が苦しみの原因です。しかし永遠の楽しみの源はアートマン、中からくるものです。

スカン：楽しみ

アクシャヤン：「衰えない」という形容詞。

スカン・アクシャヤン：衰えない楽しみ。

（スカン・アクシャヤンの語順だと意味が「楽しみ衰えない」になるので、アクシャヤン・スカンと言った方が良い）

**２つのスカン（楽しみ）**

スカンには２種類あります。

**①シャヤン・スカン**：衰えて最終的になくなる楽しみ。世俗的な楽しみ。

源は外からくるもの、物質が源で、結果は「苦しみ悲しみ」（ドゥッカ・ヨーナヤ）です。

**②アクシャヤン・スカン**：衰えない永遠の楽しみ。霊的な楽しみ。

源は中からくるもの、アートマンが源で、その結果は「衰えることのない永遠の楽しみ」です。

永遠の楽しみの源はアートマンです。そしてアートマンは外にあるのではなく、一番近い、私の中にあります。しかし残念なことに我々は気づいていません。もしその気づきがあったら、伊勢神宮やベナレス、メッカなどの聖地にあちこち巡礼に行く必要がありません。

例えばジャコウジカ。ジャコウジカのおヘソの中にはとてもすばらしい香りがあります。しかし気づきがありませんから、その香りの源をいつも外に探しまわっています。

我々はジャコウジカと同じ。いつも外に「楽しみの源」を探しているので、苦しみ悲しみ（ドゥッカ・ヨーナヤ）の状態なのです。

また、英語でExtrovertとIntrovertという言葉があります。

・Extrovert：いつも外に見ていること。

・Introvert：自分の中に見ていること。

外のものと中のものとは大きな違いがあり、外のものは中のものの反射だけです。

１つベンガル語のすばらしい言葉があります。英語で翻訳すると

「Stand before man, Stand befor ocean.」

人の前に立っていることと、海の前に立っていることは一緒だという意味です。

例えば、海は無限のようです。人の中にも海のような無限のものがあります。そして我々は、自分の中に宇宙を持っていますが、その気づきはありません。

ですけれども「意識」、「潜在意識」、「超意識」の３つのポイントから考えると理解することができます。

我々は、「意識」に関して少しわかります。「潜在意識」については、自分の潜在意識に何があるかはわかりませんが、「潜在意識」があるということはわかります。「超意識」は無限です。

もし、これらすべてが自分の中に入っていると考えれば、我々は自分の中に宇宙を持っていることになります。しかし気づきがありません。

外の宇宙は中の宇宙の反射だけです。同じように、外の楽しみは中の楽しみの反射だけです。

そのことを集中して考えれば、本当のものと反射したものとは全然違うことがわかります。

例えば太陽。太陽の光が反射して湖に太陽を映しますが、湖面に映った太陽は本当の太陽ではありません。実際の太陽と湖に反射した太陽とでは、どのくらい違うかすぐにわかります。

また別の物語があります。

満月の夜、湖にはとても大きな月が綺麗に映ります。その湖に住んでいる魚たちは、湖に映った月の反射を友達だと思い、夜通し一緒に遊んでいました。しかし朝になると月の反射はなくなって、友達がどこに行ったか不思議に思いました。魚たちは、友達の本当の居場所は空だと知らなかったのです。

このように、本当の物は自分の中にあるのですが、我々は偽物の反射で十分満足しています。

**2種類の楽しみ**

楽しみには２種類あります。

**①世俗的な楽しみ**（Secular Joy）

**②霊的な楽しみ**（Spilitual Joy）

**「世俗的な楽しみ」と「霊的な楽しみ」との違い**

①源について

世俗的な楽しみの源は物質。霊的な楽しみの源は意識。

世俗的な人は、感覚の対象を外に向けて楽しみを探しています。

綺麗な服、綺麗なドレス、綺麗な人、綺麗な女性など、外に探して世俗的な楽しみを求めています。

しかし、本当の永遠の楽しみは、自分の中にある「魂」が源です。

永遠な霊的な楽しみの源は魂（soul）、別の言葉でブラフマンです。信者の考えでは神様です。

つまりアートマンとブラフマン、神様の本性はすべて同じ「サッチダーナンダ」です。

②本質（Nature）について

霊的な楽しみは本当の物です。世俗的な楽しみは偽物で、本当の物の反射にすぎません。

③質（Quality）について

世俗的な楽しみのレベルは低いです。霊的な楽しみのレベルは高いです。

④量（Quantity）について

霊的な楽しみは永遠で無限。衰えません。（アクシャヤン）

世俗的な楽しみは小さく、衰えます。（シャヤン）

⑤継続時間（duration）について

世俗的な楽しみは限度があって短い時間。霊的な楽しみは永遠です。

⑥反動

世俗的な楽しみを楽しんだ後には反動があります。霊的な楽しみの反動はなにもありません。

「ドゥッカ・ヨーナヤ　エーヴァ　テー」（5章22節）にあるように、世俗的な楽しみは、いろいろな苦しみと悲しみの原因になっています。

**ボーガ・ドゥッカ**（楽しみの最中に生じる苦しみ）　※ 『2022年11月大使館講話』参照

楽しんでいる時にもいろいろな苦しみ、恐れ、心配、嫉妬、うぬぼれがあります。

楽しんでいる最中にも、その楽しみがいつ終わるのかという心配がいつも心の中にあります。

例えば、お酒をもっと飲みたいがお金がない。もっと食べたいけどお金がないなどの心配。

嫉妬もあります。レストランで、隣のお客様はたくさんご馳走を注文しましたが、私はお金がないのでそんなに注文できない。

うぬぼれやプライドもあります。大きな車やフェラーリなどの高級車を運転している人や、サンルーフを開けて運転している人の顔は、どこか自慢気に見えます。

**ポリナーマ・ドゥッカ**（楽しみ後に生じる苦しみ）

世俗的な楽しみの結果は、力やお金を浪費します。世俗的な楽しみは無料ではないので、たくさん楽しんだ結果かなりお金を使うことになります。食べすぎたりして病気になる可能性もあります。

**サムスカーラ・ドゥッカ**（何度も繰り返す自分の傾向から生じる苦しみ）

世俗的な楽しみを繰り返すことによって、楽しみ（ボーガ）を求める傾向がもっと強くなります。

心は「今度だけ楽しみましょう。その後は楽しみたいという願いは出ませんから、今度だけ願いを満足させましょう」と言って誘惑します。しかし願いを満足させた後、一時的になくなっても、また「楽しみたいという願い」が出てきます。

例えば、火の中にバターを入れると火はもっと強くなるように、何回も何回も楽しみを満足させると、「楽しみたいという願い」は益々増えます。前回の講話では、欲望が無くならないという例で、マハーバーラタに出てくるジャヤーティの話をしました。

**世俗的な楽しみを味わった後の後悔**

とても世俗的な人は何をしても構わないので後悔はありませんが、少し欲望を抑制したい人、道徳的になりたい人にとっては、もし非道徳的な方法で楽しむと後悔は強くなります。

道徳的になりたい人、清らかになりたい人、霊的になりたい人にとって、それは堕落したように思えて

とてもとても強い後悔が残ります。それもドゥッカです。

ですけれども、強い意志と霊的な実践を続けることで、絶対に欲望を抑制できるようになります。

なぜなら、突然人は聖者になりませんから。聖者になる前にはたくさん自分との戦いあり、堕落することもあります。そうやってだんだん清らかになり、やっと聖者になるのです。

**楽しみ（ボーガ）の種類**

我々の本性は至福、サット・チット・アーナンダですから、みなさん楽しみが好きなのは自然なことです。

ですから楽しみを願うことは悪いことではありません。しかし「その楽しみが何の種類なのか」を気を付けないといけません。―それが大事なポイントです。

なぜならみなさんは「最高の楽しみ」が欲しいですから。アートマンだけが永遠の楽しみの源ですから、それを考えて瞑想しないといけません。

その関係で、バガヴァッド・ギーターの18章36節～39節に大事な話があります。

その節には、すべての人にとって、とても大事な「楽しみのガイドライン」が書かれてあります。

みなさんそれをよく理解して、「楽しみのガイドライン」に従って注意していけば問題がなくなります。

18章36節

スカン　トゥ　イダーニーン　トリ・ヴィダン　シュリヌ　メー　バラタルシャバ/アッビャーサード　ラマテー　ヤットラ　ドゥフカーンタン　チャ　ニガッチャティ//18-36

*バーラタ族で最も優れた者（アルジュナ）よ！ 長い修練を経てそれを獲得することができ、それによって苦しみが消えてしまうような3種類の幸福について、私の説明を聞きなさい。 //18-36*

18章37節

ヤッ　タド アグレー　ヴィシャム　イヴァ　パリナーメームリ　トーパマム/タッ スカン サーットヴィカン

プロークタム　アートマ・ブッディ・プラサーダ・ジャム//18-37

*初めは毒薬のように苦しくても、終わりには甘露となるような、真我を悟る清純な知性から生じる喜びは、サットワ的幸福と言われる。//18-37*

18章38節

ヴィシャイェーンドリヤ・サンヨーガード　ヤッ　タド　アグレー　ムリトーパマム/パリナーメー　ヴィシャム　イヴァ　タッ　スカン　ラージャサン　スムリタム//18-38

*初めは甘露のようであっても、終わりには毒薬となるような、感覚とその対象との接触から生じる喜びは、ラジャス的幸福と言われる。//18-38*

18章39節

ヤド　アグレー　チャーヌバンデー　チャ　スカン　モーハナム　アートマナハ/ニッドラーラッシャ・プラマードーッタン　タッ　ターマサム　ウダーフリタム//18-39

*自己の本性について、初めから終わりまで妄想を抱き、惰眠や怠惰や怠慢から生じる喜びは、タマス的幸福と言われる。//18-39*

これらは、とても人生のために大事な「楽しみのガイドライン」です。

それに従いますと、我々はドゥッカ・ヨーナヤ（苦しみ悲しみ）の状態にはならず、困ることがありません。

**２種類の楽しみ**

①最初は毒のようで、最後に甘露になるような楽しみ。

②最初は甘露のようで、最後は毒になるような楽しみ。

最初は毒のような楽しみは、初めは難しく面白くないのでとても大変です。

例えば瞑想。毎日早く起きて瞑想してください、神様のことを集中して考えてください－という助言はみなさん知ってますが、とても大変で面白くはないので実践しません。もちろん最初は大変ですが、毎日毎日実践を続けていると、最終的に幸せになることは知っています。

みなさんは幸せになりたいと思っていていますし、幸せの方法を知っていますが、それを実践していません。ですから何も変わらないです。

サットワ的な楽しみの方法は、最初はとても大変ですが、続けると自分を助けると信じて実践すること。

ラジャス的楽しみ（ラジャシック・スカ）のやり方は反対です。最初は甘い、面白い、好きなもの（食事、服などいろいろ）、これらは最後にドゥッカ・ヨーナヤになり、毒になります。

もう一度5章22節を見てください。

イェー　ヒ　サンスパルシャ・ジャー　ボーガー　ドゥッカ・ヨーナヤ　エーヴァ　テー/アーディ・アンタ　ヴァンタハ　カウンテーヤ　ナ　テーシュ　ラマテー　ブダハ

**普通の人と賢い人との違い**

普通の人の欲望は、「感覚的対象」、「世俗的な対象」、「一時的なもの」からでていますので、苦しみ悲しみの状態になり、反動もあります。

しかし賢い人（ブダハ）は、タマス的ラジャス的楽しみと、サットワ的楽しみは何が違うかよくわかりますから、その種類のものは好きにはなりません。また、周りに世俗的な楽しみの物があったとしても、それを見たとしても、決して誘惑されることはありません。

世俗的な人と賢い人は何が違うのかというと、世俗的な人は世俗的なものから楽しみが欲しいと思いますが、賢い人は世俗的な楽しみが一時的だと知っているので欲しいとは思いません。

例えば蜃気楼。世俗的な人（無知の人）は、砂漠で蜃気楼を見ると水が欲しいと思います。

しかし賢い人は、蜃気楼を見ても水の期待はありません。

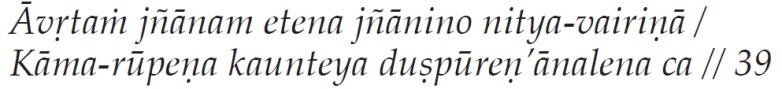
どちらも同じ蜃気楼を見ていますが、そこから水を期待するかしないかが違います。

また別の例。あなたは、海を歩いていて喉が乾いたので、海の水を飲みました。しかし海の水は塩辛いので、飲んでも飲んでも喉の渇きはなくなるどころか、もっと増えます。－これが我々の状態です。

賢い人は、海の水を飲んでも喉の乾きがなくならないことが初めからわかっています。

それから、賢い人（ブダハ）にとって、一時的な楽しみ（ボーガ）は、いつも敵（ニッテャ・ヴァイリ）です。賢い人の敵はボーガです。

３章３７～３９節を見てください。



アーヴリタン　ジュニャーナム　エーテーナ　ギャニーナム※　ニッテャ・ヴァイリナー/カーマ・ルーペナ　カウンテーヤ　ドゥシュプーレーナーナレーナ　チャ//3-39

※バガヴァッドギーターの本では「ジュニャーニノー」と表記

*このように、人の知性は欲望という仇敵に覆われて曇っている。そしてその仇敵とは、消えることの無い欲望という火なのだ。クンティー妃の息子（アルジュナ）よ！ //3-39*

「ボーガ」と「カーマ」は同じ。「カーマ」は包括的な意味でいろいろな「欲望」のことで、直接的意味では「肉欲」です。この場合は「肉欲」の意味で理解してください。

「欲望」と翻訳するといろいろな種類の欲望があって混乱しますが、「肉欲」というとイメージがもっとはっきりわかるからです。すべての欲望の中で一番強いのが「肉欲」です。

そして賢い人にとって、「肉欲」は好きではないだけではなく「永遠の敵」です。例えば嫌いな食べ物を食べても死にませんが、毒を飲むと死にます。そのように、賢い人にとって「肉欲」は「毒」なのです。

**「永遠の敵」（ニッテャ・ヴァイリナー）**

「敵（ヴァイリナー）」と「永遠の敵（ニッテャ・ヴァイリナー）」との違いは何でしょうか。

例えば敵の中には、あるとき敵だったとしても後で友達になる可能性もあります。しかし肉欲は「永遠の敵」です。「永遠の敵」は最初から最後まで変わらず敵なので、賢い人は肉欲を避けています。

同じように、ギャーニは世俗的な楽しみ（ボーガ）を避けています。なぜならボーガは悟りの大きな障害だからです。霊的な人生の基礎は「心の清らかさ・純粋さ」なので、ボーガがあると清らかになることができません。反対にカーマやボーガは不純になるので、賢い人にとってはそれを楽しまないだけでなく、敵になるのです。

賢い人（ブダハ）にとって、一時的な楽しみ（ボーガ）・肉欲（カーマ）は、「永遠の敵」（ニッテャ・ヴァイリナー）です。

バガヴァッド・ギーターは、言葉１つをとってもいろいろな章や節にアイディアが散りばめられて書かれているので、このように併せて勉強するととても深い理解ができます。それがバガヴァッド・ギーターの勉強の方法です。その節だけに集中するのではなく、同じものについて、あちこちに書かれてあるアイディアをいろいろ集めて勉強すると、そのイメージが深くできます。

この勉強会の目的は、一部分の翻訳だけではなく、いろいろなアイディアを集めて説明することです。

それから、「マハーバーラタ」から１つお話しします。※①

ある森の中に、飲食を断ち、決して寝ずに長い間瞑想するという苦行（タパッシャー）をしているヴィシュヴァーミトラという聖者がいました。それを見て、神々の王は心配しました。なぜなら、苦行をすることによって修行者は強い霊的な力を持つようになり、自分の立場が危うくなると怖れたからです。

インドラは地位（ポスト）なので、永遠ではありません。

今のインドラは厳しい苦行の結果インドラになりました。ですからもし別の方が苦行をすると、その方がインドラになる可能性があり、自分のポストが危うくなるので今のインドラは恐れました。

そして考えた末、邪魔をするために天国から大変美しい女性メーナカを送り、ヴィシュヴァーミトラを誘惑するように言いました。メーナカは足に鈴をつけて大変美しく踊りました。その鈴はとても甘い音で響いたので、ヴィシュヴァーミトラはだんだん深い瞑想から覚め、目の前の美人に驚きました。そしてその女性を好きになって結婚して瞑想終わり！

この物語のように、肉欲は悟りの大きな障害です。

賢い人はその種類の楽しみ、肉欲を「敵」と考えて避けています。

カタ・ウパニシャッドは言っています。

「霊的な道を歩むことは、鋭いカミソリの刃の上を歩くのと同じ」だと。

カミソリの刃の上を歩くのはとても危険で死ぬこともあります。霊的な道はそのくらいいろいろ気を付けないといけないということです。

**楽しみ（ボーガ）の欲望の源**

それでは、この世俗的な楽しみ（ボーガ）の欲望は、どこから来ているのでしょうか？

欲望の源はどこでしょうか？

世俗的な人は知りたくないと思いますが、霊的な人、道徳的な人にとってはとても大事なことです。

参加者のレオナルドさんは以前、上智大学と聖泉女子大学の学生にアンケートを配って自分の勉強のために調査をしました。その中の１つの質問は、「世俗的な楽しみが欲しいか、それとも抑制したいか」という内容でした。以外なことに、大勢の学生は「抑制したい」と答えていました。

このように、抑制したいと思うことは大事です。ではその「楽しみの欲望」はどこから来るのでしょうか？来年次のクラスで説明します。

Ｑ＆Ａ

（参加者）ブダハはギャーニと同じですか？

（マハーラージ）ギャーニにもいろいろなレベルがあります。たとえば科学者。科学者にもいろいろなレベルがあり、ただ調査している科学者とアインシュタインとはレベルが違いませんか？

同じようにギャーニのレベルを理解しないといけません。ギャーナ・ヨーガを実践している人もギャーニ。

悟った人もギャーニです。両方ギャーニですがレベルが全然違います。ブダハは本当に高いレベルのギャーニです。

（参加者）後悔はポリナーマ・ドゥッカから来ているのですか？

（マハーラージ）世俗的な人は後悔がないです。嘘をついても後悔しません。ポリナーマ・ドゥッカに入れてもいいですけど大事なポイントですから別に話したほうがいいです。

（参加者）後悔のドゥッカはサンスクリット語はなんですか？

（マハーラージ）グループがないです。サンスクリット語はアヌソーチャナ（Anushochana）。

ソーチャナ（shochana）は、病気やお金がないなど、私たちが日常経験する可能性がある「普通の悲しみ」で、いろいろな種類があります。

アヌソーチャナは、「したくなくても、してしまった」という後悔の悲しみです。本当はしたくなかったけれども、サムスカーラやいろいろな原因で「してしまった」ということです。

例えばパーティーで、あなたはお酒を飲みたくなかったのに、友達に勧められて少しお酒を飲みました。少しだけのはずが、また勧められて飲むのを繰り返しているうちに、結構飲んでしまいました。

本当は飲みたくなかったけど飲んでしまった。それがアヌソーチャナ、後悔の苦しみ悲しみです。

大事なのは、最初から気を付けることです。その雰囲気の場所に入っても

人からどんなに勧められても、自分で決めたのですから私は絶対お酒は飲まない。

私の人生ですから私が決めます。もし私が困っても誰も助けに来ません。

それを理解して、自分が決めたことに従う。そのような強い心がないとクラゲみたいです。

もし自分の決意をゆるがすような友達は、自分から離れてもかまいません。

それくらい意思の力が強くなったら霊的な生活もできます。そうしないとできません。

※①

[叙事詩](https://www.weblio.jp/content/%E5%8F%99%E4%BA%8B%E8%A9%A9)[『マハーバーラタ』](https://www.weblio.jp/content/%E3%80%8E%E3%83%9E%E3%83%8F%E3%83%BC%E3%83%90%E3%83%BC%E3%83%A9%E3%82%BF%E3%80%8F)では、[メーナカー](https://www.weblio.jp/content/%E3%83%A1%E3%83%BC%E3%83%8A%E3%82%AB%E3%83%BC)とヴィシュヴァーミトラの[物語](https://www.weblio.jp/content/%E7%89%A9%E8%AA%9E)は[シャクンタラー](https://www.weblio.jp/content/%E3%82%B7%E3%83%A3%E3%82%AF%E3%83%B3%E3%82%BF%E3%83%A9%E3%83%BC)[誕生](https://www.weblio.jp/content/%E8%AA%95%E7%94%9F)譚の[一部](https://www.weblio.jp/content/%E4%B8%80%E9%83%A8)として[語られ](https://www.weblio.jp/content/%E8%AA%9E%E3%82%89%E3%82%8C)ている。[一方](https://www.weblio.jp/content/%E4%B8%80%E6%96%B9)の[『ラーマーヤナ』](https://www.weblio.jp/content/%E3%80%8E%E3%83%A9%E3%83%BC%E3%83%9E%E3%83%BC%E3%83%A4%E3%83%8A%E3%80%8F)では[聖仙](https://www.weblio.jp/content/%E8%81%96%E4%BB%99)[ヴァシシュタ](https://www.weblio.jp/content/%E3%83%B4%E3%82%A1%E3%82%B7%E3%82%B7%E3%83%A5%E3%82%BF)との[対立](https://www.weblio.jp/content/%E5%AF%BE%E7%AB%8B)に[端を発する](https://www.weblio.jp/content/%E7%AB%AF%E3%82%92%E7%99%BA%E3%81%99%E3%82%8B)ヴィシュヴァーミトラの[苦行](https://www.weblio.jp/content/%E8%8B%A6%E8%A1%8C)の[エピソード](https://www.weblio.jp/content/%E3%82%A8%E3%83%94%E3%82%BD%E3%83%BC%E3%83%89)の[一部](https://www.weblio.jp/content/%E4%B8%80%E9%83%A8)として[語られ](https://www.weblio.jp/content/%E8%AA%9E%E3%82%89%E3%82%8C)ている。 [『マハーバーラタ』](https://www.weblio.jp/content/%E3%80%8E%E3%83%9E%E3%83%8F%E3%83%BC%E3%83%90%E3%83%BC%E3%83%A9%E3%82%BF%E3%80%8F)によると、ヴィシュヴァーミトラの[苦行](https://www.weblio.jp/content/%E8%8B%A6%E8%A1%8C)を[見た](https://www.weblio.jp/content/%E8%A6%8B%E3%81%9F)[インドラ](https://www.weblio.jp/content/%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%89%E3%83%A9)神は[彼に](https://www.weblio.jp/content/%E5%BD%BC%E3%81%AB)よって[神々](https://www.weblio.jp/content/%E7%A5%9E%E3%80%85)の王の[地位](https://www.weblio.jp/content/%E5%9C%B0%E4%BD%8D)から[追い落とされ](https://www.weblio.jp/content/%E8%BF%BD%E3%81%84%E8%90%BD%E3%81%A8%E3%81%95%E3%82%8C)るの[ではないか](https://www.weblio.jp/content/%E3%81%A7%E3%81%AF%E3%81%AA%E3%81%84%E3%81%8B)と[恐れた](https://www.weblio.jp/content/%E6%81%90%E3%82%8C%E3%81%9F)。そこで[メーナカー](https://www.weblio.jp/content/%E3%83%A1%E3%83%BC%E3%83%8A%E3%82%AB%E3%83%BC)にヴィシュヴァーミトラを[誘惑して](https://www.weblio.jp/content/%E8%AA%98%E6%83%91%E3%81%97%E3%81%A6)[苦行](https://www.weblio.jp/content/%E8%8B%A6%E8%A1%8C)を[止めさせる](https://www.weblio.jp/content/%E6%AD%A2%E3%82%81%E3%81%95%E3%81%9B%E3%82%8B)よう[命じた](https://www.weblio.jp/content/%E5%91%BD%E3%81%98%E3%81%9F)。これ[に対して](https://www.weblio.jp/content/%E3%81%AB%E5%AF%BE%E3%81%97%E3%81%A6)[聖仙](https://www.weblio.jp/content/%E8%81%96%E4%BB%99)を[恐れ](https://www.weblio.jp/content/%E6%81%90%E3%82%8C)る[メーナカー](https://www.weblio.jp/content/%E3%83%A1%E3%83%BC%E3%83%8A%E3%82%AB%E3%83%BC)は「[聖仙](https://www.weblio.jp/content/%E8%81%96%E4%BB%99)が[怒り](https://www.weblio.jp/content/%E6%80%92%E3%82%8A)を[自分に](https://www.weblio.jp/content/%E8%87%AA%E5%88%86%E3%81%AB)向ける[ことがない](https://www.weblio.jp/content/%E3%81%93%E3%81%A8%E3%81%8C%E3%81%AA%E3%81%84)ように、私が[聖仙](https://www.weblio.jp/content/%E8%81%96%E4%BB%99)を[誘惑して](https://www.weblio.jp/content/%E8%AA%98%E6%83%91%E3%81%97%E3%81%A6)いるまさに[そのとき](https://www.weblio.jp/content/%E3%81%9D%E3%81%AE%E3%81%A8%E3%81%8D)に、[風神](https://www.weblio.jp/content/%E9%A2%A8%E7%A5%9E)[ヴァーユ](https://www.weblio.jp/content/%E3%83%B4%E3%82%A1%E3%83%BC%E3%83%A6)が[私の](https://www.weblio.jp/content/%E7%A7%81%E3%81%AE)[衣服](https://www.weblio.jp/content/%E8%A1%A3%E6%9C%8D)を[奪い去る](https://www.weblio.jp/content/%E5%A5%AA%E3%81%84%E5%8E%BB%E3%82%8B)ように[手配して](https://www.weblio.jp/content/%E6%89%8B%E9%85%8D%E3%81%97%E3%81%A6)ほしい」と[訴えた](https://www.weblio.jp/content/%E8%A8%B4%E3%81%88%E3%81%9F)。この[訴え](https://www.weblio.jp/content/%E8%A8%B4%E3%81%88)が[認められた](https://www.weblio.jp/content/%E8%AA%8D%E3%82%81%E3%82%89%E3%82%8C%E3%81%9F)とき、[メーナカー](https://www.weblio.jp/content/%E3%83%A1%E3%83%BC%E3%83%8A%E3%82%AB%E3%83%BC)は[風神](https://www.weblio.jp/content/%E9%A2%A8%E7%A5%9E)[とともに](https://www.weblio.jp/content/%E3%81%A8%E3%81%A8%E3%82%82%E3%81%AB)ヴィシュヴァーミトラの庵を[訪れ](https://www.weblio.jp/content/%E8%A8%AA%E3%82%8C)、[聖仙](https://www.weblio.jp/content/%E8%81%96%E4%BB%99)のそばで[戯れた](https://www.weblio.jp/content/%E6%88%AF%E3%82%8C%E3%81%9F)。すると[風神](https://www.weblio.jp/content/%E9%A2%A8%E7%A5%9E)の[起こした](https://www.weblio.jp/content/%E8%B5%B7%E3%81%93%E3%81%97%E3%81%9F)風が[メーナカー](https://www.weblio.jp/content/%E3%83%A1%E3%83%BC%E3%83%8A%E3%82%AB%E3%83%BC)の[衣服](https://www.weblio.jp/content/%E8%A1%A3%E6%9C%8D)を[吹き払った](https://www.weblio.jp/content/%E5%90%B9%E3%81%8D%E6%89%95%E3%81%A3%E3%81%9F)。彼女の[裸体](https://www.weblio.jp/content/%E8%A3%B8%E4%BD%93)に[心を奪われ](https://www.weblio.jp/content/%E5%BF%83%E3%82%92%E5%A5%AA%E3%82%8F%E3%82%8C)たヴィシュヴァーミトラは、[長い](https://www.weblio.jp/content/%E9%95%B7%E3%81%84)[月日](https://www.weblio.jp/content/%E6%9C%88%E6%97%A5)を[メーナカー](https://www.weblio.jp/content/%E3%83%A1%E3%83%BC%E3%83%8A%E3%82%AB%E3%83%BC)[とともに](https://www.weblio.jp/content/%E3%81%A8%E3%81%A8%E3%82%82%E3%81%AB)[過ごした](https://www.weblio.jp/content/%E9%81%8E%E3%81%94%E3%81%97%E3%81%9F)。やがて[メーナカー](https://www.weblio.jp/content/%E3%83%A1%E3%83%BC%E3%83%8A%E3%82%AB%E3%83%BC)はヴィシュヴァーミトラ[の子](https://www.weblio.jp/content/%E3%81%AE%E5%AD%90)を[身ごもった](https://www.weblio.jp/content/%E8%BA%AB%E3%81%94%E3%82%82%E3%81%A3%E3%81%9F)。そして娘が[生まれ](https://www.weblio.jp/content/%E7%94%9F%E3%81%BE%E3%82%8C)ると[目的](https://www.weblio.jp/content/%E7%9B%AE%E7%9A%84)が[達成された](https://www.weblio.jp/content/%E9%81%94%E6%88%90%E3%81%95%E3%82%8C%E3%81%9F)と[考え](https://www.weblio.jp/content/%E8%80%83%E3%81%88)、[子供](https://www.weblio.jp/content/%E5%AD%90%E4%BE%9B)を[ヒマラヤ山](https://www.weblio.jp/content/%E3%83%92%E3%83%9E%E3%83%A9%E3%83%A4%E5%B1%B1)[中の](https://www.weblio.jp/content/%E4%B8%AD%E3%81%AE)マーリニー川のそばに[捨て](https://www.weblio.jp/content/%E6%8D%A8%E3%81%A6)、[インドラ](https://www.weblio.jp/content/%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%89%E3%83%A9)の[宮殿](https://www.weblio.jp/content/%E5%AE%AE%E6%AE%BF)に[帰った](https://www.weblio.jp/content/%E5%B8%B0%E3%81%A3%E3%81%9F)。このとき[生まれた](https://www.weblio.jp/content/%E7%94%9F%E3%81%BE%E3%82%8C%E3%81%9F)娘が[シャクンタラー](https://www.weblio.jp/content/%E3%82%B7%E3%83%A3%E3%82%AF%E3%83%B3%E3%82%BF%E3%83%A9%E3%83%BC)である。[後に](https://www.weblio.jp/content/%E5%BE%8C%E3%81%AB)[シャクンタラー](https://www.weblio.jp/content/%E3%82%B7%E3%83%A3%E3%82%AF%E3%83%B3%E3%82%BF%E3%83%A9%E3%83%BC)はドフシャンタ王の妃となり、[バラタ](https://www.weblio.jp/content/%E3%83%90%E3%83%A9%E3%82%BF)（[バラタ族](https://www.weblio.jp/content/%E3%83%90%E3%83%A9%E3%82%BF%E6%97%8F)の祖）を[生んだ](https://www.weblio.jp/content/%E7%94%9F%E3%82%93%E3%81%A0)。 [『ラーマーヤナ』](https://www.weblio.jp/content/%E3%80%8E%E3%83%A9%E3%83%BC%E3%83%9E%E3%83%BC%E3%83%A4%E3%83%8A%E3%80%8F)によると、[1000年](https://www.weblio.jp/content/1000%E5%B9%B4)の間[苦行](https://www.weblio.jp/content/%E8%8B%A6%E8%A1%8C)を[続けた](https://www.weblio.jp/content/%E7%B6%9A%E3%81%91%E3%81%9F)ヴィシュヴァーミトラは[ブラフマー神](https://www.weblio.jp/content/%E3%83%96%E3%83%A9%E3%83%95%E3%83%9E%E3%83%BC%E7%A5%9E)に[認められ](https://www.weblio.jp/content/%E8%AA%8D%E3%82%81%E3%82%89%E3%82%8C)て、[苦行](https://www.weblio.jp/content/%E8%8B%A6%E8%A1%8C)の[成果](https://www.weblio.jp/content/%E6%88%90%E6%9E%9C)を[受け取った](https://www.weblio.jp/content/%E5%8F%97%E3%81%91%E5%8F%96%E3%81%A3%E3%81%9F)。ヴィシュヴァーミトラはなおも[苦行](https://www.weblio.jp/content/%E8%8B%A6%E8%A1%8C)を[続けた](https://www.weblio.jp/content/%E7%B6%9A%E3%81%91%E3%81%9F)が、川で[沐浴する](https://www.weblio.jp/content/%E6%B2%90%E6%B5%B4%E3%81%99%E3%82%8B)[メーナカー](https://www.weblio.jp/content/%E3%83%A1%E3%83%BC%E3%83%8A%E3%82%AB%E3%83%BC)を[見て](https://www.weblio.jp/content/%E8%A6%8B%E3%81%A6)、[自分の](https://www.weblio.jp/content/%E8%87%AA%E5%88%86%E3%81%AE)庵[に連れて](https://www.weblio.jp/content/%E3%81%AB%E9%80%A3%E3%82%8C%E3%81%A6)[帰り](https://www.weblio.jp/content/%E5%B8%B0%E3%82%8A)、[10年](https://www.weblio.jp/content/10%E5%B9%B4)をともに[過ごした](https://www.weblio.jp/content/%E9%81%8E%E3%81%94%E3%81%97%E3%81%9F)。しかし[修行](https://www.weblio.jp/content/%E4%BF%AE%E8%A1%8C)が[水泡に帰した](https://www.weblio.jp/content/%E6%B0%B4%E6%B3%A1%E3%81%AB%E5%B8%B0%E3%81%97%E3%81%9F)ことを[悟った](https://www.weblio.jp/content/%E6%82%9F%E3%81%A3%E3%81%9F)ヴィシュヴァーミトラ、彼女が[現れた](https://www.weblio.jp/content/%E7%8F%BE%E3%82%8C%E3%81%9F)のは[インドラ](https://www.weblio.jp/content/%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%89%E3%83%A9)神と[神々](https://www.weblio.jp/content/%E7%A5%9E%E3%80%85)の謀であると[考えて](https://www.weblio.jp/content/%E8%80%83%E3%81%88%E3%81%A6)、[メーナカー](https://www.weblio.jp/content/%E3%83%A1%E3%83%BC%E3%83%8A%E3%82%AB%E3%83%BC)を[捨てた](https://www.weblio.jp/content/%E6%8D%A8%E3%81%A6%E3%81%9F)という。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』